

『経営に役立つヒント』

令和六年九月一日

第二百五十六号

終戦から七十九年となる八月十五日正午、靖国神社の拝殿において、一分間の黙禱をささげました。同時に、国家のために殉職された英霊に、尊崇の念を持って感謝の誠をささげ、日本の将来の為、残りの人生を捧げることを誓いました。

GHQ（進駐軍）の占領下に置かれ、我々日本人の精神的支柱の一つである、戦没者の霊を祀る日本で唯一の神社「靖国神社」は、国家の管理を離れ、一宗教法人として今に到りました。

かつて、日本軍の将兵が戦場で死に直面した時の合言葉は「靖国神社で会おう」でした。靖国神社は、招魂社に起源を發し、一八五三年の黒船来航以降の国家のために殉じた英霊二四六万余柱が祀られています。

戦前から戦争直後まで宮司を務めた鈴木孝雄氏（鈴木貫太郎の長弟）は「遺族の方々は神ということばの厳肅さを感じております。・・・これは遺族の皆様にと与えられた最大の名誉であります。神に列せられ、広く国民から敬われ、恐れ多くも天皇陛下御自ら参拝頂く」とは、臣下として無上の光榮とするところであります」と当時の靖国神社の性格について語っております。

それが、今では、天皇陛下のご参拝はおろか、総理大臣の参拝まで、隣国を慮り自肅する有様です。そもそも、諸外国からの内政干渉に断固たる発言も出来ない体たらくが、日本の政界の姿です。

アメリカならば、アーリントン墓地があり、どの国も、自国の為に殉じた将兵を祀ることは、当然のことです。

極東国際軍事裁判（東京裁判）により、A級戦犯とされ死刑判決を受けた軍人の東條英機、土肥原賢二、板垣征四郎、木村兵太郎、松井石根、武藤章、文官の広田弘毅の七名が、一九四八年一月二三日に、巣鴨プリズン一三号鉄扉で処刑されました。彼らの遺骨は、秘かに進駐軍により海に撒かれました。敵国とはいえ、武士の情けも、人道上の礼儀もわきまえず、遺骨を遺族に返すこともしなかったのです。

その、巣鴨プリズン跡地は、サンシャインビルが建ち、小さな石碑が残っているだけで、当時の面影は有りません。

裁判開始が「四月二十九日」。死刑執行が「二月二三日」。いずれも、我々日本人には忘れられない非常に重要な記念日、そう、天皇誕生日を選びました。進駐軍、アメリカは、何たる非情、何たる破廉恥な国でしょう。

社長、どうか日本を、まともな国、軍隊をもつ普通の国にして参りましょう。

今月のポイント

今ある平和は、尊い英霊の犠牲の上にあります。

